

クルマエビの急性ウイルス血症(PAV)防疫対策について

福永 稔

クルマエビの急性ウイルス血症(PAV)の感染環は十分解明されていないが、種苗生産期における発症の主な原因は親エビからの垂直感染と推定されており¹⁾、その防疫対策には親エビのウイルス検査や、受精卵の洗浄²⁾が重要な対策として挙げられている。徳島県においても天然クルマエビを親エビとしてクルマエビ種苗生産を行い、種苗放流を実施している。そこで、急性ウイルス血症の防疫対策の一環として、種苗生産に用いる親エビおよび種苗生産された稚エビを対象に検査マニュアル「PCR によるPRDV(RV - PJ)の検出法」³⁾によりウイルス検査を行った。

材料と方法

1) 天然クルマエビウイルス検査

播磨灘海域天然クルマエビ

エビ 90 尾の腹部から採血し、各 10 尾を 1 ロットとしてウイルス検査を実施した。

紀伊水道海域天然クルマエビ

平成 10 年 5 月 14 日に小型底引き網で漁獲された天然クルマエビから肉眼により卵の成熟した個体を選別し、選別された 80 尾の腹部から採血し、各 10 尾 1 ロットとしてウイルス検査を実施した。

2) 種苗生産用親エビウイルス検査

紀伊水道海域において平成 10 年 5 月 27～28 日に小型底引き網で漁獲された天然クルマエビから、種苗生産用親エビとして肉眼により卵の成熟した個体を選別し、27 日には選別された 198 尾の腹部から採血し、1 ロット各 20 尾(1 ロットのみ 18 尾)、28 日に選別された 189 尾の腹部から採血し 1 ロット各 20 尾(1 ロットのみ 9 尾)としてウイルス検査を実施した。

3) 種苗生産稚エビウイルス検査

徳島県栽培漁業センターがウイルス検査で陰性の確認された親エビから採卵、種苗生産された稚エビについてウイルス検査を実施した。

平成 10 年 7 月 10 日(P25)に、飼育水槽 4 面から各約 100 尾を試料として採集した。また、飼料による擬陽性の検査用に各試料とも約 100 尾取り上げ、7 月 7～10 日まで無給餌飼育した稚エビを用いた。各試料とも 60 尾の頭甲胸を切り取り、ウイルス検査試料とした。

結果

1) 天然クルマエビウイルス検査

播磨灘海域天然クルマエビ

9 ロットともウイルス検査陰性であった。

紀伊水道海域天然クルマエビ

8 ロットともウイルス検査陰性であった。

2) 種苗生産用親エビウイルス検査

5月27, 28日の各10ロットともウイルス検査陰性であったため, 徳島県栽培漁業センターでこの親エビから採卵, 種苗生産がおこなわれた。

3) 種苗生産稚エビウイルス検査

飼育水槽4面および無給餌飼育水槽1面の各ロットともウイルス検査陰性であったことおよび種苗生産期間中大量へい死は見られなかったことから, 徳島県栽培漁業センターから放流用種苗として出荷された。

文献

- 1) 佐々木和之・大津隆一・的場達人(1996)陸上中間育成施設で発生したクルマエビの RV - PJ による疾病．福岡水技研報, 5, 25 - 29
- 2) 桃山和夫(1990)クルマエビ稚仔のパキキュロウイルス中腸腺壊死症(BMN)に関する研究．山口県内海水産試験場報告, 20, p.91
- 3) 検査マニュアル:(社)日本水産資源保護協会, 平成8年度魚病技術者研修魚病専修コース(研修用資料 PCR による PRDV(RV - PJ)の検出法水産庁養殖研究所病理部・熊本県水産研究センター)